

Title	一九〇五-一九〇七年の第一次ロシア革命のドイツに及ぼした影響： ドイツ社会運動史にかんする最近の資料 (三の一)
Sub Title	Documents and materials of the history of German working class movement (1/3) : Die Auswirkungen der ersten russischen Revolution von 1905-1907 auf Deutschland, herausgegeben von Prof. Dr. Leo Stern, 1954 Documents and materials of the history of German working class movement (1/3) : Die Einwirkungen der ersten russischen Revolution von 1905-1907 auf Deutschland, herausgegeben von Prof. Dr. Leo Stern, 1954
Author	飯田, 鼎
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1960
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.53, No.1 (1960. 1) ,p.64(64)- 84(84)
JaLC DOI	10.14991/001.19600101-0064
Abstract	
Notes	資料
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19600101-0064">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19600101-0064</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

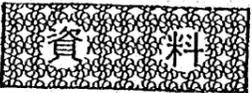
# 一九〇五—一九〇七年の第一次ロシア

## 革命のドイツに及ぼした影響

(Die Auswirkungen der Ersten Russischen Revolution von 1905-1907 auf Deutschland, herausgegeben von Prof. Dr. Leo Stern, 1955.)

——ドイツ社会運動史にかんする最近の資料 (三〇一)——

飯 田 鼎



筆者はすでに、二回にわたりドイツ社会運動史にかんする最近の研究資料について簡単な考察を試みてきたが、ここにとりあげた「第一次ロシア革命のドイツに及ぼせる影響」と題する二巻の資料はさきに紹介した「社会主義鎮圧法下における社会民主党の闘争」と同じ編集者のもとに企画されたものであり、その目的とするところは、編集者レオ・シュテルン教授の序文に明らかである。すなわちつぎのようにいう。「一九五二年七月、統一社会党大会において、ワルター・ウルブリヒト (Walter Ulbricht) は、帝国主義の段階におけるドイツ労働運動の歴史を科学的にきりひらくことの必要性をとくに力説し、その際は、就中一九〇五年のロシア革命

の時期のドイツにおける偉大な労働者階級の闘争を指摘した」。ドイツ民主共和国の第一書記ウルブリヒトの名は、その歴大な労働運動史にかんする講演や著作活動 (Walter Ulbricht; Zur Geschichte der deutschen Arbeiterbewegung, 4 Bde.) を通じて、すでにわれわれに親しみ深いものとなっており、この発言が政治的な配慮や意味に支えられていることは勿論であるが、それと同時に何よりも、現在のドイツ民主共和国において、ドイツ労働者階級の革命的伝統を正しく評価することが緊急に要請されていることの忠実な反映にほかならない。とくにシュテルン教授は、この時期の労働運動史の研究の重要性を指摘し、現在の課題としての意義を強調してつぎのようにのべている。

「一九〇五年の第一次ロシア革命の熱狂の年におけるドイツ労働

者階級運動の革命的伝統の認識は、独占資本、土地貴族および軍国主義や帝国主義的冒険政策や社会的国家的圧迫に反対するわれわれの今日の闘争と、ドイツの統一と世界平和、諸国民の友好、階級の連帯やプロレタリア国際主義のためのわれわれの闘争を、熱心におしすすめるのにふさわしい。一九〇五年から一九〇七年のロシア革命の間におけるドイツ労働者階級の態度の認識はまた、ドイツ労働者階級の運動における機会主義という階級を裏切る政策を暴露するにも適している。その政策は直接に、一九一四年八月四日のドイツ社会民主党の降伏に、一九一八年の一月革命の裏切りに、そしてすべてその後のブルジョア階級との協同の政策からおこったドイツ労働運動に致命的な結果を導いたものであった。しかしながらとくに、一九〇五年から一九〇七年の影響の分析は、先頭に立っているカール・リプクネヒトやロイザ・ルクセンブルク、フランツ・メーリングやクララ・ツェトキンとともに、ドイツ社会民主党左派——そのすべての欠点や弱点にもかかわらず重要な革命的な行動を立証しなければならぬが——の偉大な歴史的役割を認識するのにふさわしい(傍点筆者)。

このような明確な問題意識と現実的課題に支えられて編み上げられたこの二冊の資料集の内容は一体どのようなものであろうか。今回は、筆者の都合で第一巻だけをとりあげ、第二巻は次号にゆずりたいが、紹介と具体的な検討に入るに先立ち、例によって、冒頭に掲げられているレオ・シュテルン教授および助手ルドルフ・ザウエ

ルツァップ (Wiss. Assistent, Rudolf Saenzapf) の共同論文「一九〇五年—一九〇七年の第一次ロシア革命のドイツに及ぼした影響」によって、二十世紀初頭のドイツ労働運動の直面した様々な問題や矛盾について考察してみよう。

### 二

「アメリカとヨーロッパにおける、のちにはまたアジアにおける資本主義の最高の段階としての帝国主義は、一八九八—一九一四年のころに完全に形づくられた。スペインアメリカ戦争(一八九八年)、イギリスボーア戦争(一八九九—一九〇二年)、日露戦争(一九〇四—一九〇五)、そして一九〇〇年のヨーロッパの経済恐慌——これらが、世界史の新时代的の主要な歴史的指標である」。

帝国主義の到来は、一般的に、(一)資本主義諸国間の経済的競争の激化、(二)世界再分割のための侵略戦争の危険性の増大、(三)労働者階級にたいする搾取およびその運動にたいする弾圧の強化とこれにたいする抵抗運動の活発化などの特徴的な現象をもたらすことは周知の事実であるが、更に分析的にこれから必然的におこる目立った基本的な諸矛盾を整理するならば、つぎのように要約することができるであろう。(一)国際的な規模におけるブルジョアジーとプロレタリアートとの階級闘争の激化、(二)独占的な超過利潤の追求と資本主義發展の不均衡の結果として生ずる各資本主義諸国のブルジョアジー相互の矛盾、(三)それにもかかわらず、労働運動への社会主義の浸透

にともなう労働者階級の意識の革命化に恐怖し、経済的利害の対立という矛盾を胚胎させたまま労働者運動という共通の敵を前にして妥協しようとするブルジョアジー、(四)これらの諸矛盾を、勤労者大衆の犠牲の上に、戦争という暴力的な手段に訴えることによってきりぬけようとする支配者と、これに反対し、革命によって既存の政府を打倒しようとする労働者階級の前衛政党との矛盾などがあげられる。そしてこれらの諸矛盾は十九世紀末期から二十世紀初頭にかけてのツァーリズム・ロシアの状態に集中的にあらわれていた。われわれはしばしば、資本主義的發展のもっとも進んだイギリスに社会主義革命がおこらずに、封建的絶対主義の残滓がもっとも根強かつたロシアになぜおこったかという点について、マルクス主義の誤謬として説明されるのをきいた。しかし、ロシア資本主義を帝国主義段階に到達したヨーロッパ資本主義に対して特殊対普通との関係に把握するならば、ロシアにおける革命の必然性を理解することは必ずしも困難ではない。すなわち「特殊なものとは普通のものと結びついており、またあらゆる事物はその内部に矛盾の特殊性だけでなく矛盾の普遍性をも含み、普遍性は特殊性のうちに存在しているから、われわれが一定の事物を研究する場合には、この二つの側面およびその相互の結びつきを發見し、ある事物の内部における特殊性と普遍性との二つの側面および相互の結びつきを發見し、ある事物とその他の多くの事物との相互の結びつきを發見しなければならぬ」。ロシアに革命がおこったということは、本来、資本主義が

内面的にもつ根本的な矛盾が、帝国主義段階に至って一層はげしくなり、とくに革命を可能にするような客観的な諸条件がロシアにおいてもっとも明らかに存在するに至ったということの意味する。すなわち、帝政ロシアが当時、帝国主義のあらゆる矛盾の集積点であったと同時にその矛盾のすべてがロシアの労働者および農民にいわよせされた結果として、革命は必然的におこらざるをえなかったのである。

「ロシアにおける革命は多年の間に成熟してきた。二十世紀の始め、ロシアには国内に革命的爆發の近いことをはっきりと立証するような経済的政治的諸条件がつくり出された。この時期までにロシアの資本主義は、全世界におけると同じように、その發展の最高にして最後の段階——帝国主義に入った。帝国主義は資本主義制度のあらゆる社会的、政治的矛盾の極度の尖鋭化を特徴としている。ロシアの帝国主義は、その特殊性をもっていた。高度に集中化された大工業があり、そこでは資本主義独占がますます大きく發展していた。資本家の小さなグループが国の工業と財政の全てを支配していた。この高度に發展した資本主義は、経済と政治機構における農奴制のきわめて強い遺物とからみあっていた。これらの遺物の主要なもの、ツァー制と地主的土地所有であった。封建的(農奴制的)遺物は国の社会制度全体にその刻印を押して、プロレタリアートに対する特に残忍な搾取型態、農民の極端な窮乏、非ロシア諸民族にたいする乱暴な抑圧を生んだ」。

マルクス・レーニン主義の古典的な解釈に従えば、労働運動には客観的側面 (Die objektive Seite) と主体的側面 (Die subjektive Seite) という二つの側面があり、前者は、労働者階級の意志や意識から独立して運動し、全社会の發展を規制するところの過程であり、後者は、経済的な基礎において独立して動くこの過程の労働者意識への反映である。具体的に言うならば、一定の時期における一国のプロレタリアートの革命的な力というものは、その歴史的な發展において、経済的な發展の本源的な力によって決定されるばかりでなく、彼らの社会主義的意識の發展、その組織的な結合やプロレタリアートの前衛の役割を果すところの革命的な闘争のための党の成立によって、そしてさらにまたその党がその戦術や戦略において導かれるところの進歩的革命的な理論によって決定されるのである。

いうまでもなく、資本主義の發展が立ちおくれたという点では、二十世紀初頭のロシアは、イギリス、アメリカはもちろんだドイツやフランスにもはるかにおかれていた。それにもかかわらずそこには革命的な状況が支配的であったという事実を証明することは容易である。(一)腐敗した絶対主義的支配者(ツァーリズムとそれを支える貴族的大土地所有者)、(二)ツァーリズムと結びつく大資本家の小グループによるプロレタリアートに対する苛酷にして残忍な搾取、(三)農民の極端な窮乏化と階級意識の覚醒、(四)レーニンによってひきいられるロシア社会民主労働党の指導によるプロレタリアートへの革

一九〇五—一九〇七年の第一次ロシア革命のドイツに及ぼした影響

命的理論の注入、(五)日露戦争の結果としてのツァーの財政的破綻と国内経済の危機。革命的状況をつくり出すこれらの諸条件は「資本主義のもっとも發展した国に社会主義革命がおこるはずである」という公式的な定理が、ツァーリズム・ロシアにあてはまるかどうかという議論を超えて、厳として存在したのである。

ロシアにおける革命的諸状況の必然性として、いまひとつ、革命的な運動の中心の一国から他の国への転位の問題について究明しなければならぬ。資本主義發展の停滞性、ブルジョア階級の絶対主義勢力にたいする相対的脆弱性とプロレタリアートの階級的形成におけるいちじるしい立ちおくれにもかかわらず、ロシアにはすでに十九世紀末期に革命的な状況の到来が予見されたのであった。すなわちフリードリッヒ・エンゲルスは、一八七五年につきのようについている。「ロシア帝政の打倒、ロシア帝国の瓦解、これこそドイツ・プロレタリアートの勝利を完遂するための先決条件のひとつである。……この条件は対外戦争がおれば急速に成就されるであろう。……ロシアは革命の前夜にある……その革命は、恐らく資本家階級の上層により、場合によっては政府自身によってさへ口火を切られるであろうが、直ちに立憲主義の段階を通り越して、農民を担い手とする革命へと推進されてゆくに違いない。……この革命は、全欧州の反動勢力中これまで無傷であった最後の予備軍を、一撃のもとに打倒するという点だけをとり上げて、全欧州にとってもっとも重大な意味を有つ革命となる」と。そしてその六年後、死の

直前にあったマルクスは、断定を避けながら、つぎのような臆測をたてている。すなわち「ロシアは、必ずしも資本主義発展の全段階を通過することなく、恐らくは革命勃発後、直ちに農業の集団化と工業の社会主義化との達成に着手するのではなからうか」と。さらにエンゲルスはその晩年の論文「ロシア・ツァーリスムの対外政策」の最後を、つぎのような注目すべき一節をもってその結論を結んでいる。

「一般に西ヨーロッパは、とくに西ヨーロッパの労働者階級は、ロシアの革命党の勝利とツァーリの絶対主義の倒壊とに関心を、はなはだふかい関心をもつものである。ヨーロッパは、規模とはげしき点で、前代未聞の世界戦争の深淵にむかつて、急坂をくだるよう加速度的にすべりおりつつある。ここでこれを阻止しようるものはただひとつ、ロシアにおける社会体制の変化があるだけである。この体制変化が数年内にきつとくることは、いささかもうたがいをいれない。この変化がこないとしてでもさけられないことがおこるまでに、この変化が機を逸せずきてもらいたいものである」(傍点筆者)。

このようなマルクスやエンゲルスの予言的な言葉は、たんにそれが恣意的な想像や希望的な観測としてのべられたものではなく、ヨーロッパの政治的社会的な状況のすくなくな推移のなかに、近い将来において大破局となつて爆発すべき芽を、その類稀な燭眼をもって洞察し発見したことにほかならなかつた。十九世紀末期には社会主義

運動と労働運動の中心は、社会民主党内部に右翼日和見主義が抬頭し、党指導部の主流が次第に合法的議会主義に陥りつつあったドイツから、帝国主義の諸矛盾がもっとも集約的な形であらわれ、労働者階級が革命的前衛政党によって指導され、階級闘争が日一日と激化しつつあったロシアに移りつつあったのである。

ではロシアにおける革命的状况の緊迫化が、実にヨーロッパにおける革命の発火点として、ますます重大な様相を呈してきた二十世紀初頭、地理的にこれに隣接し、ロシア革命の影響がもっとも波及し易く、革命的な労働運動がその輝かしい歴史を誇っていたドイツの状態はどうだったろうか。

いうまでもなくドイツも、十九世紀末期から二十世紀初頭にかけて、資本主義発展の新しい段階——帝国主義の段階に入っていた。エンゲルスの言葉をかりるならば、十九世紀後半のドイツは、まさに「第一流の工業国」となり、一八九五年から一九〇〇年にかけては、自由競争の資本主義から独占資本主義への決定的転換がなしてげられたのであつた。二十世紀の初頭とともにはじまった金融寡頭支配、すなわち群小銀行の巨大銀行による合併とその集中化は、産業および銀行資本の金融資本への転化と並行しておこなわれ、銀行トラストによる全ドイツの産業活動および経済生活の支配が、もっとも特徴的な現象となつた。いまこれを労働者階級の側からみれば、発展した帝国主義の段階においては、(一)実質賃金の上昇は停滞的であるにもかかわらず、請負制度などによって労働強化が一層促

進せしめられたこと、(二)その結果として、労働者階級の生活条件の悪化として窮乏化、それによっておこる国内市場の狭隘化と発展する生産力との矛盾、(三)国外市場への進出のための関税保護政策とダンピング、国内における物価の絶えざる値上り、(四)海外市場奪取をめぐる資本主義列強とのげしき争いと局部的武力衝突、(五)軍国主義的政策の強力な推進にともなう物価の上昇と税金の過重な負担による大衆の生活苦と憤懣の増大、(六)階級の対立の激化とストライキの頻発などである。

とりわけドイツ帝国主義の膨脹政策は、対英関係を悪化せしめ、ドイツの対露接近、英仏協商の締結などの複雑な国際関係を通じて独仏関係は一層険悪且つ緊迫化させられたのであつた。戦争の危機を絶えず胚胎せしめた帝国主義ドイツの外交政策の結果は、対外的には軍備拡張による軍事予算の増大、従つてまた国内政治の面では労働者大衆の生活諸条件の悪化をもたらししたのである。社会主義鎮圧法以来見られなかつた規模における資本家攻勢の激化、とりわけ労働組合との闘争を目的とする資本家の団体 (Unternehmerverbände) が出現したことは注目すべきである。彼らは、工場閉鎖、ブラック・リスト、職業紹介制度、経営者の黄色組合の建設などの硬軟両様の方法を用いて、労働者階級運動の統一を阻害することを試み、とりわけドイツ社会民主党内部における右派勢力の抬頭は、この傾向を助長するに役立つたのである。このような資本家的攻勢が一層はげしくなつてくるにつれて、労働者階級も大規模なスト

ライキをもつてこれに應じ、たとえば、一八〇三年から一八〇四年までのザクセンの織維業労働者の壮大なストライキやわけても一八〇五年一月のルール地帯の鉄山労働者のストライキの如きは、ロシアにすでに革命が進展しつつあつた折柄、その影響のもとにあつたものとして注目すべきである。

ロシア革命の影響の拡大、ドイツ帝国の対外対内政策の矛盾の激化を背景にこのような労働者階級による革命的な運動の昂まりにたいして、これを理論的に指導して反動的な政策を抑止すべき勢力たらしめる任務を負うていたドイツ社会民主党は、どのような状態にあつたか。前世紀末、ドイツ労働運動の内部には、修正主義という形式において改良主義的思想が抬頭し、改良主義者たちは、ドイツ労働者階級の前衛としての社会民主党をして、議会議主義・自由主義の上に立つ改良主義政党たらしめようと努力したのであつた。ウルブリヒトは、これについてつぎのようにのべている。

「ロシアとは対照的に、ドイツにおいては、十九世紀から二十世紀への転換期の帝国主義の時期の始めに、社会民主党、労働組合および同業組合の強化な組織が存在していた。しかしながらこれらのあらゆる組織のなかで、右翼機会主義的な一団が決定的な影響をもつていた。社会民主党の組織は、一種選挙団体 (Wahlverein) であつて、そのなかでは、黨員数の過大評価のイデオロギーが支配的であつた。それらは、選挙によって、より高い投票数の獲得と平和的な改革の貫徹を目指していたのであつた。

た<sup>18)</sup>。

社会民主党指導部の、あくまでも合法的な日和見主義に終始しようとする態度にたいして、大衆の間には、一九〇五年のロシア革命の報道が伝わるや、次第に動揺がひろがり、それはやがて同情となり、彼らの生活諸条件の悪化や政治的な諸権利の剝奪にたいするいきどおりとなって、ストライキの濤が急速に昂まったのである。一九〇五年一月二日、ペテルスブルクの流血の惨事の報道が、ドイツに伝えられたとき、一月七日にはじまったルール地帯の鉱山労働者の争議は最高潮に達していなかったが、しかしそれでも一月十七日には一五五、〇〇〇人の鉱山労働者が闘争に起ち上り、二〇日には上部シレジア河畔の鉱山労働者一四、〇〇〇人が新たにストライキに加入し、また左翼的な新聞「ライプツィヒ新聞」(Leipziger Volkszeitung) はつぎのように書いている。

「ロシアには革命が勃発した。そして労働者階級がその担い手である。これは、この運動が再び萌芽のうちに摘みとられないということを保障するものである……。ロシアの労働者階級が獲ちようとしているツァーリズムにたいする勝利において、国際的なプロレタリアートは、資本主義にたいする彼ら自身の勝利、ロシア政府が呼ばれているところの犯罪人の団体にたいするロシア国民の自由のための闘争の前提条件を見出すのである。ほんとうに過ぎのように見えるのだ。『ロシア人の勝利はドイツ人の勝利であり、ヨーロッパの勝利であり、国際的な勝利である』<sup>19)</sup>。

れないで、皆が一日の労働時間を少なくして働くようにとりかかっています。すべてこれらのことは、そんなにすらすらと簡単にまた当然のことのように運ばれていますので、党にはほんの時々しかその報告がないという有様です。事実ロシアの労働者との団結と一致の感情が非常に強いので、誰か自分からそのために働いてはみても、却って思わず驚く位です。それから、ここに革命の興味ある結果があります。あらゆる工場には、労働者によって選出された委員会が『自治的に』作られ、この委員会が労働条件や労働者の雇傭及び解雇等をきめています。雇傭主が『自分自身の主人』であることは事実上消滅してしまいました……。もちろん革命が終って『正常な状態』にかえれば、これらすべては全くちがったものになるでしょう。しかしこのような状態はあと方もなくすぎ去るものではありません。今のところ革命によってなされた仕事は大したものです。階級対立の深化、情勢の激化とその明白化。が、これらすべては外国では到底見られません！ 闘争がますます深刻になっていったからというので、人々は闘争がもう止んだと思っています。それどころか組織はたゆまず延びています<sup>20)</sup>。

ロシア革命の勃発の影響がひろまるにつれて、ドイツにおけるストライキ運動は、次第にその規模とひろがりとを示してきた。つぎの表はそのことを物語っている。

一九〇五—一九〇七年の第一次ロシア革命のドイツに及ぼした影響

七〇 (七〇)

一九〇五年の一月九日のペテルスブルクの流血の惨事、いわゆる「血の日曜日」<sup>18)</sup>は、ドイツの労働者階級はもちろん、中小市民階級の広汎な層やブルジョア的な知識層の間に、異常な衝動と大きな反響をまきおこした。ひとり大衆のみならず、運動の指導者にたいして深甚な反省をせまり、新たな教訓をあたえたことである。当時、この革命を身をもって体験したローザ・ルクセンブルク (Rosa Luxemburg) は、つぎのように書いている。「ペテルスブルクの事件を通じてわれわれに与えられたものは、革命的な楽観主義にたいするひとつの根本的な訓戒である<sup>19)</sup>。これは日和見主義化した社会民主党首脳とロシア革命によって影響をうけストライキに突入しつつある労働者階級の革命的な状態との矛盾、そのなかにあって、ドイツの労働者階級をいかにして社会主義革命の担い手として組織すべきかという問題に深刻に悩みつづけた左翼社会民主主義の苦悶を如実に代弁している。彼女はつぎのようにも書いている。

「このことと同じようにペテルスブルクでも、現在、運動の弱点をなしているものは、言うに言われない悲惨を弘めてゆく失業の増大です……。失業、それは革命の傷です、それを防ぐ手段はありません！ しかし、そこでは大衆のひそかな英雄主義と階級感情が生長しています。わたしはそれをわがドイツ人達に示したいと思います。どこでも労働者はつぎのようになりかかっています。たとえば就業者はいつも一週間の賃金の一日分を失業者に与えるといった風に。また仕事が一週四日間に減らされる時は、誰もが解雇さ

年次	争議数	参加人員	争議日数
一九〇〇	八五三	一五、七二	一、三三〇、〇五
一九〇一	七七一	四八、五三三	一、一九四、五五三
一九〇二	八六一	五七、七三三	九四四、三三七
一九〇三	一、八二二	三三、五五五	二、六三三、三三三
一九〇四	一、六五五	一五、九七五	二、三〇一、二五四
一九〇五	二、三三三	五七、九六四	七、六三三、八〇三
一九〇六	三、四四〇	三六、〇四二	六、三三七、六五五
一九〇七	二、七五二	二八、〇〇〇	五、三三三、四七五

た一九〇五年九月半には、フィルマ・スィーメンズ会社 (Firma Siemens und Halske) の旋盤工一七〇名が賃金値上げを要求したのにたいし、経営者はあるいは工場閉鎖あ

るいは解雇をもってこれに応えた。しかし闘争がもっとも熾烈をきわめたのは、ザクセンおよびテューリンゲンの繊維労働者の場合であった。ザクセンおよびテューリンゲンの労働者は、当時の平均生計費が週二五マルクであったにもかかわらず、週平均賃金は男子は一三マルク、女子に至ってはわずかに八マルクにすぎなかったばかりでなく、労働時間も一二時間から一四時間という極端に長いものであった。そこでとくにグライツ・ゲレル (Gleits Gerler) 地帯の労働者は、週八マルクの賃金の保障と一日実働九時間を要求したが、これにたいして経営者は、労働者側との交渉をまったく拒否し、その結果、七月および八月にかけて闘争がつけられ、その間に、メーラーネ (Meierne)、グラカウ (Glaukau)、ゲラおよびフォグランド (Vogland) の各地域において四万人の労働者が工場から閉め出された<sup>22)</sup>。この争議で注目すべきことは、ザクセン・リテ

七一 (七一)

ーリンゲンの織物業経営者は、一斉に工場閉鎖を行なったのたいたし、労働者階級は、堅い団結と統一的行動を保ち、とくにキリスト教系の組合が、社会民主党系の労働組合との間に共同闘争を行なったことは高く評価されなければならない。

このようにロシア革命の勃発を契機としてまたドイツ国内における矛盾の激化の結果、階級闘争の波がたかまり、労働者階級のうちの進歩的な分子が社会主義革命の方向に目覚めつつあったとき、ドイツ社会民主党は重大な危機に遭遇しつつあった。すでに当時国際的な社会主義運動の過程において、政治的な大衆ストライキの必要性が強く叫ばれた論じられてきたのであった。<sup>(23)</sup>しかしドイツ社会民主党内部においては、長い間この問題は論ずることが厳禁されており、一九〇四年の社会民主党のブレイメン党大会は、この闘争方式を吟味しようとするカール・リープクネヒトやクララ・ツェトキンの提議を拒否した。ロシア革命の影響のもとに、政治的なストライキのドイツにおける必要性を痛感しつつあった革命的な労働者たちは、労働組合および社会民主党の指導者にせまって政治的なストライキの闘争方式の問題をとりあげること主張したにもかかわらず、改良主義的な労働組合指導者や右翼社会主義者は、この要求を、「革命的浪漫主義者」や「無政府主義者」のそれとして拒否した。これについてエルスナーはつぎのようにのべている。

「労働組合とドイツ社会民主党の日和見主義的指導者たちは第一次ロシア革命という一大歴史的事件にたいして、同情を示さな

かったばかりか、むしろ内心拒否的な態度をとった。一九〇五年の英雄的な十二月蜂起につながるロシア労働者階級の大・大衆ストライキは、彼らにとっては、当時すでに『純然たるロシア的現象』であって、これら奇妙な指導者の解釈によれば、そこにはドイツ労働者の学ぶべきものは何もないのであった。つまり、一九〇五年のケルンの労働組合大会で大衆ストライキを否認した労働組合幹部にとって、ゼネラル・ストライキは、ゼネラル・ナンセンスにはかならなかったのだ。なるほど党は、おなじ年のイエーナの党大会で、大衆ストライキを一応闘争手段として承認したけれども、『とくに、平等かつ直接の普通選挙権とか団結権とを要求する場合』の防衛的手段としてのみ承認したにすぎなかった。そして『大衆ストライキ』といわずに、おすおすとはずかしげに『大衆的労働停止』というよびかたをしたのである。<sup>(24)</sup>

ローザ・ルクセンブルグ、カール・リープクネヒト、クララ・ツェトキンおよびフランツ・メーリングを先頭とする社会民主党左派の指導者たちは、ロシア革命の闘いから経験を学び、折からドイツに昂まりつつあった労働運動の発展——繊維産業労働者やルール地帯の鉱山労働者の大規模な争議をピークとする——をさらにおしすため、政治的なゼネラル・ストライキを全国的にまきおこそうとした。だがこの態度は当然、一九〇三年、労働組合会議のドレスデン大会においてその地盤を築き、一九〇五年の大会においてその勝利を決定的なものとしたカール・レギエン(Carl Legien)等を目指

導者とする組合幹部との間にはげしい衝突をひきおこし、その結果

は、一九〇五年九月二三日、イエーナで開かれたドイツ社会民主党大会における政治的な大衆ストライキの問題をめぐる左右両派の対立の激化となつてあらわれたのである。反資本主義、反軍国主義および労働者階級の国際的連帯の強化を旗じるしとして、政治的大衆的なストライキを強調したリープクネヒト等の努力にもかかわらず、イエーナ大会の決議は、きわめて弱々しいものであった。

一九〇五年の十月には、ロシア革命はますます深刻な様相を呈し、ツァーリズム打倒のためのゼネラル・ストライキがロシア帝国全土に発展した。ツァーリはやむなく市民的自由にかんする布告につづいて普通選挙権を約束したのであったが、労働者階級は革命的な闘争をゆるめなかった。そしてついにモスクワにおける十二月の蜂起によって最高潮に達したのである。一九〇五年十二月二日、革命的なロシアのプロレタリアートのドイツを含めた国際的な労働者階級にたいする呼びかけが、ライプツィヒ・フォルクスツァイトゥング紙にあらわれたが、その最後にはつぎのようにのべられている。

「ロシア革命の問題、全人類の問題が危機に瀕している。ロシアのプロレタリアートは自己に加えられた権力にたいする精力的な抗議によって、そのポーランドの同胞たちを支援しました。親愛なる同志よ、われわれはこの危機がさしさまっているときに、これらの危険を防止するため、またロシア人民を支援するために、あなたがどのような手段をとる用意があるかを知らせてほしいの

です。

同志的な挨拶をもって！

ロシア社会民主労働党中央委員会および組織委員会<sup>(25)</sup>

このよびかけに応じて、ドイツ社会民主党は、ロシア革命を支持するデモンストレーションを三級選挙にたいする反対闘争に結びつけることに成功し、その結果一九〇五年十二月の初めには、ライプツィヒ、ドレスデン、シエムニッツおよびザクセンの他の諸都市に民衆のデモンストレーションと警官隊との衝突が激化した。ロシアにおける政治上の重大な変化のドイツにあたえた憂慮すべき傾向に無関心でありえなかったウィルヘルム二世は、一方においてツァーリズムとの妥協をはかることによって国際政治的な地歩を固めるため、他方において国外および国内の革命的運動および労働運動に弾圧を加えるため、ロシアと軍事同盟を結ぶことをさえ考え、軍備の拡大に狂奔したのであったが、ツァーリがフランス帝国主義に財政的に強く依存していたため軍事同盟は果されなかった。ここでロシア革命のひとつの背景をなしているヨーロッパ国際政治における諸矛盾について簡単に考察するならば、(一)ドイツとフランスとの軍事的対立の矛盾の激化——モロッコ問題などをめぐって——、(二)フランスにたいするロシアの依存、従ってツァーリとカイゼルとのフランスを媒介とする矛盾、(三)それにもかかわらず、ロシア革命を契機として自己の立場を強化するためロシアに武力干渉を試みるとはかるカイゼル、(四)フランスとの関係においてドイツの軍国主義をおそれながら

しかもなお革命運動鎮圧の「頼もしき同志」を、ドイツのなかに見出すツァー、以上のように把握できるであろう。

このような諸矛盾と複雑な国際関係を背景に、ロシア革命はドイツ労働運動に深刻な影響をあたえつつ進展していったが、その過程においてドイツ社会民主党が十九世紀の末期以来内包してきた矛盾がはげしく露呈されるに至った。「ヨーロッパ労働運動における差異」のなかで、レーニンが、労働運動における差異のための異常に重要な原因としてとくに強調した——「権力の途と似而非自由の途」という二つの支配の方法が、ドイツにもあらわれてきた。後者すなわち似而非自由主義的支配こそ、労働運動における日和見主義を呼びおこしたのであった。やがて一九〇五年十二月のモスクワにおける蜂起は、軍隊によって弾圧され、困難な状況が見えはじめた頃、ドイツにおいては、ハンブルクを中心に政治的な大ストライキがおこった。革命的な状況のさしせまる一九〇六年一月二日、ドイツの多くの都市には大衆集會が開かれ、ベルリンおよびその周辺においては、九五の労働者の集會が開催され、一九〇七年にエッセンで開かれた社会民主党大会には、追放されたロシアの同志にたいして三四〇、〇〇〇マルクがよせられたほどであった。(一)ロシア革命における労働者階級の運動の未曾有の昂揚、(二)その結果としてのドイツにおける労働運動の革命化、(三)革命の推移——モスクワの蜂起を峠として退潮の兆しをみせはじめた——にともなうドイツ労働者階級の連帯の精神の強化、こうした状況のなかで、ドイツ社会民主党

には明らかに対立するいくつかの理論的イデオロギー的潮流が渦まいてきた。すでに十九世紀末期以来その矛盾を内包し、さきに政治的大衆ストライキの戦術をめぐって左右両派に対立した社会民主党には、いまやいくつかの相互に拮抗する流派が労働運動の革命的状況を前にして、そのヘゲモニーを争うという事態がおとすれた。いまこれらの諸流をつぎのように整理してみることにしよう。

- (一) 右派 (改良主義者) ダヴィッド (Eduard David)、ハイネ (Wolfgang Heine)、ノギエン (Carl Legien)
- (二) 中間派 (日和見主義者) カウツキー (Karl Kautsky)、ヘーネル (A. Bebel)
- (三) 左派 (正統派マルクス主義者) ローザ・ルクセンブルク (Rosa Luxemburg)、クララ・ツェトキン (Clara Zetkin)、カール・リープクネヒト (Karl Liebknecht)、フランツ・メーリング (Franz Mehring)

右派と呼ばれる改良主義者は、マルクス主義にたいする理論的な修正の上に立っており、いわゆる修正主義者と呼んでもさしつかえなからう。つぎに中間派は、カウツキーに見られるように、一応正統派マルクス主義理論の上に立って革命的言辭を弄しながら、合法的議會主義の枠から脱することができず、革命的状況の到来とともに右派に接近する。最後は戦闘的マルクス主義者のグループである。ロシア革命の勃発を前にして右派がとった根本的誤謬はロシア革命から何も学ぼうとせず、むしろそれをドイツとは縁もゆかりもない純粋なロシア的現象とみなしたことであった。(28) としてベール (August Bebel) でさえもこれに同調したのであった。(29) もちろん左派としてのベールはロシア革命を支持し、イエーナの党大会においては、大衆的なストライキの決議に加わったが、しかしそれにもかかわらず、ロシア革命の性格を純粹にロシア的現象であると考えた点では、右派と同調したのである。同様のことをカウツキーについても言うことができる。かつてベルンシュタインの修正主義が登場したとき、正統派マルクス主義の闘将としてこれと争ったのは、ほかならぬカウツキーであった。そして一九〇五年当時彼は、「ヨーロッパのいかなる政府も、ドイツほどロシアに似ているものはない」と断定することをばからなかった。その当時のカウツキーが一九〇五—一七年のロシア革命の昂揚と衰亡の過程において次第にかわっていったのは何故であろうか。社会民主党指導部の日和見主義への屈服と大衆の不満、政治的大衆ストライキをめぐる党と労働組合との矛盾、労働組合運動をめぐる社会民主党左右両派の確執、社会民主党左派に支柱を見出す革命的労働者とこれを妨害しようとする右派および中間派との矛盾、ロシア革命のドイツに及ぼした影響はかくも深刻であった。およそ革命とは、いかなるものでもあれ、あらゆる人々にひとつの徹底した回答を要求してやまない。すなわち、「これを支持するか否定するか」のいずれかであり、この両者の中間的な態度はありえない。その苛烈な闘争の過程を通じてのみ、誰が真に人民の味方であるかが明らかになるであろう。

一九〇五—一七年の第一次ロシア革命のドイツに及ぼした影響

- (1) レーニン「帝國主義論」堀江邑一訳 (国民文庫版) 所収、「帝國主義と社会主義の分裂」一八六頁。
- (2) 毛沢東は、その「実践論」のなかで、この点についてつぎのように説明する。「資本主義はまだあらわれず、そのような実践はまだなかったからである。マルクス主義は資本主義社会の産物でしかありえなかったのである。自由競争的な資本主義の時代に、マルクスは前もって帝國主義の時代に特有な諸法則を具体的に認識することはできなかった。それは、帝國主義という資本主義の最後の段階がまだきておらず、そのような実践がまだなかったからであり、レーニンとスターリンだけが、この任務をうけもつことができたのである」。毛沢東著「実践論・矛盾論」松村一人・竹内実共訳一四—一五頁 (岩波文庫)。
- (3) 前掲書、五九頁。
- (4) レーニンは、つぎのようにのべている。

「革命の歴史では数十年、数百年を通じて成熟する諸矛盾が、表面にかがび上ってくる。生活は異常に豊富になってくる。いつもは日陰の生活をしており、そのためにしばしば皮相な観察者から無視され、もしくは軽蔑されさえする大衆が、積極的な闘士として政治舞台に登場する。この大衆は、万人の目のまえで瀕ぶみをして進路をさぐり任務をさだめ、自分や自分のすべてのイデオログの理論をためして実践によってまなぶ。この大衆は歴史によって負わされた巨大な世界的任務に応じようとして英雄的に努力

- しようとする」(レーニン全集、第八巻、大月版、九四頁)。
- (5) ソ連邦共産党史(1)、ソ連政治経済研究会訳、現代社版、一一一―一二頁。
- (6) Einleitung, S. XVI.
- (7) Friedrich Engels; On Social Condition in Russia, Selected Works, 1936, vol. II pp. 669-86. (F. I. ショーマン著、坂本、勝田、渡辺三氏共訳「ソヴェートの政治」(1)、三九―四〇頁から引用)。
- (8) ヴェーラー・ザスリツキへの手紙の草稿(前掲シューマン、四〇頁から引用)。
- (9) マルクス・エンゲルス選集第十七巻「国際社会主義運動」大月版、一〇六一―一〇七頁。
- (10) Einleitung; S. XVI.
- (11) エンゲルス「マンヌスにおける階級闘争の序文」、マルクス・エンゲルス選集第五巻「一八四八年の革命——マンヌス——」一六二―一六三頁。
- (12) Jürgen Kuczynski; Die Geschichte der Lage der Arbeiter in Deutschland, Bd I, 1947, SS. 190-191.
- (13) Einleitung; SS. XXII-XXXIII.
- (14) Kuczynski; Studien zur Geschichte des deutschen Imperialismus, 1952, Bd. I. S. 208 ff.
- (15) Walter Ulbricht; Zur Geschichte der deutschen Arbeiterbewegung, 1955, Bd. I. S. 11.
- (16) Einleitung; ebendort, S. 11.
- (17) Einleitung, S. XXVI.
- (18) 一九〇五年一月九日、ペテルスブルクの労働者十四万以上は教会旗、聖像、ツァーの肖像を捧げ、各宮にむかって平和的な行進をおこなった。ボリシェヴィキの影響によって、請願書には政治大赦、政治的自由、人民に対する各省の責任、法律の前のあらゆる者の平等、資本にたいする労働の闘争の自由、信教の自由、八時間労働制、その他社会民主主義の綱領とする諸要求がいれられていた。この平和的な請願の運動は、挑発を目的とした大僧正ガボンの陰謀によるもので、武器をもたない労働者、彼らの妻子はツァーの命令によって一斉射撃をうけ、千人以上の者が殺され、約五千人が負傷した。「血の日曜日」と呼ばれるこの大事件は、国の内外に大きな衝動をあたえ、ロシア革命の狼火となった。
- (19) Rosa Luxemburg, Ausgew. Reden und Schriften, Bd. II, 1955, S. 221.
- (20) ルイゼ・カウツキー編、松井圭子訳「ローザ・ルクセンブルグの手紙」岩波文庫版、一〇五―一〇七頁。
- (21) Einleitung; S. XXX.
- (22) Ebendort; S. XXXII.
- (23) W. Z. Foster; History of the Three Internationals, beiterbewegung, 1955, Bd. I. S. 11.

- The World Socialist and Communist Movements from 1848 to the Present, 1955. 長瀬三三・田島昌夫訳「国際社会主義運動史」(上) 大月版、二一―五頁。
- (24) Oelssner; Rosa Luxemburg, 1952, S. 38. 杉山忠平訳「ローザ・ルクセンブルグとその生涯と業績」理論社版、四九頁。
- (25) H. Herker; Arbeiterfrage, 1922, 8. Aufl., 2 Bd., S. 409.
- (26) Einleitung; S. XLVI.
- (27) Ebendort, S. LVI.
- (28) Ebendort, S. LIX.
- (29) エルスマー著、杉山訳、前掲書六二―六三頁。

III

本書には、一二二の項目にわけられて、一九〇五年から一九〇七年までのこの事件に関連する主要な資料が掲げられている。出典として、どのようなものが利用されているかといえは、ポツダム「ドイツ中央文庫」(Deutsches Zentralarchiv, Potsdam) におさめられている旧ドイツ帝国議会の速記録、おなじく「ドイツ中央文庫」のマーセブルグ(ドイツ中部の都市)の部にある「プロシアの国務大臣会議事録」(Staatsministerial-Sitzungsprotokolle)、「皇室会議事録」(Kronratprotokolle)、「秘密文官事務室の書類」(Repositur des Geheimen Zivilkabinetts)、「プロシア内務省の

一九〇五―一九〇七年の第一次ロシア革命のドイツに及ぼした影響

- 書類」(Rep. Preussen Ministerium des Innern)、「商業および工業にかんするプロシア内閣の書類」(Rep. Preuss. Ministerium für Handel und Gewerbe)、「農業、官有地および森林にかんするプロシア内閣の書類」(Rep. Preuss. Ministerium für Landwirtschaft, Domänen und Forsten)、「ポツダム(ブランデンブルク国家主要文書」(Landesarchiv Brandenburg, Potsdam)、「ムンステンのザクセン州国家主要文書」(Sächsisches Landesarchiv, Dresden) などである。一二二項目にわたるこれらの資料の集成は、一九〇三年八月頃のセント・ペテルスブルクにおける革命前夜の模様から一九〇七年十二月のベルリンにおける状態までを、生き生きとしかも詳細に伝えている。筆者は、紙面の許す限りこれについて紹介し、これを通じてドイツにおける第二次ロシア革命の影響を考察することにして、
- 二十世紀に入るや、ロシアには革命のための経済的政治的諸条件が成熟していた。労働者階級にたいする資本家的搾取の強化、農民の極端な窮乏、非ロシア民族にたいするツァーリズムの残忍な弾圧などの結果として、国内には不安な様相がみなぎり、ロシアの各都市には生活苦のために起ち上った民衆と武装警官との間にはげしい衝突が頻発した。一九〇三年八月八日、セント・ペテルスブルクの駐露ドイツ大使は、当時の総理大臣フォン・ビュローにあててこのような騷擾の模様をつぎのように伝えている。
- 「このではいまや、至るところ興奮で沸きかえっております。

七七 (七七)

ニコライエフ(Nikolajew)では、八月一日および二日に、電信では知らせることのできない街中の騒ぎがありました。八月三日付の市長の通告によって、戸じまりをすること、非常の場合にのみ戸を開くことが指令されました……。

キエフで公けにされた布告によれば、そこでは、水曜日に武力行使がなされました。三人の労働者が殺され、二四人が負傷しました。警官一名、士官一名と多くの兵士たちが投石によって負傷しました。

昨日もまた騒ぎがつづきました。暴漢たちは、市街をねり歩いて騒動をひきおこし、まだ働いている労働者に彼らに加わるように強制するのです。ドニエプル河畔では、コサックが石を投げたために捕えられました。たびたび、一斉射撃がおこなわれました。ストライキのおかげで、大抵のパン屋は店を閉めておりますし、パンの値段も急騰しております。たとえば裸麦のパン一ポンドの値段が、二ないし三コペイカから五コペイカに上りました……。また一九〇三年八月二〇日、ワルシワ駐在のドイツ総領事は、やはりビュローにヴァイクセル河流域の状況についてつぎのように伝えている。

「ヴァイクセル河流域の工業労働者の間にも、南ロシアにおいてとくにより広い地域をおそった運動が、どうしてもひろがっております……。経済的な諸関係の不利、とくに製鉄業の危機的な状況の結果としての労働者の賃金の下落は、煽動家や密偵の社会

革命的な活動を容易にするところの支配的な不満というものを増大させます……。産業界においては、人々は眼の前に、早晚ストライキがおこり、それと結びついて労働不安が到来するという可能性を見るのです……。」

当時のヨーロッパ諸国が、その帝国主義的利益の追求と植民地再分割のためには軍事的冒険をおかしながら、社会主義運動の弾圧のためにそれらの諸矛盾をこえて統一戦線を形成していたことは、一九〇四年三月にセント・ペテルスブルクで締結された「無政府主義的」運動の統一的な監視のためのヨーロッパ各国の秘密協定」という興味深い文書によって明らかである。

「ドイツ、オーストリア、ハンガリア、デンマーク、ルーマニア、ロシア、セルビア、スウェーデンおよびノルウェー、トルコおよびブルガリアは、無政府主義運動の発展によって強力な抵抗に対抗しようとする必然性に浸透されて、以下のことを認識するものである。すなわち、定められた目標の到達のためのもっとも確実な方法は、何よりもこれらの国々の間で満足すべき方法でつくられた諒解をうちたて、無政府主義的な犯罪や暗殺の企図の抑圧にかんする共同の利益を、一致して強化することにある……。」  
このような前書きについて、たとえば、(一)条約国から追放された無政府主義者は、彼が追放のときに所属していたその国に、もっとも簡単な方法で送還すること。このような多くの規定が設けられていることを、注目すべきである。また一九〇五年一月、ロシア革命

の勃発と前後して、ルール地方の鉱山労働者は大争議に突入した。これについて一月二五日、ベルリンでは労働者の集会が開かれ、一、〇〇〇人が集まったことを官憲が記しているが、とくに社会民主党下院議員レーデブル(Georg Ledebour)が、一時間半にわたって「ルール地帯における階級闘争」という報告を行なったことについてその報告内容の概要をかかげている。

「われわれが生きている時代は、血なまぐさい戦争、大衆ストライキそして隣国の革命にみられるような雷雨のはげしい時代である。ルール地方におけるストライキは、われわれがこれまで経験したことのないような規模におけるストライキである。二〇〇、〇〇〇人以上の炭坑労働者が、もっとも悪質な企業家と闘うことを余儀なくされている。

もっとも虐待された労働者のなかに入っている鉱山労働者は、企業の合同および連合によって労働者の搾取を目的とするところの石炭シンジケートに反対して闘っている……。それゆえ社会民主党は、炭坑の国有化を主張するのだ。国家は炭坑を買収し、当然、資本主義世界で行なわれているように、炭坑主に支払わなければならない。だが社会民主党は、それをより簡単になしとげるであろう……。」

また一月二七日、内相ハンマーシュタインがウイヘルム二世にあてたルール地方の争議にかんする書簡には、つぎのような文句が見られる。

一九〇五—一九〇七年の第一次ロシア革命のドイツに及ぼした影響

「総蜂起(Geeralausstand)の宣言のうち、すべての関係ある警察官が、全力をもって、働く意志のある人々(ストライキ破りを意味する……筆者)の保護をおこない、公共の治安や秩序にたいする侵犯を、精神的に抑圧するよう指示されております……。労働者の運動に勝つために、文官の支配力が充分でないという事実は、労働者の間に動揺をほんとうに大きくし、従っていちじるしく状況の尖鋭化をもたらすものです。そのうえ、つまらぬ機会からの軍事力の使用から、流血の惨事がさげられなくなるのです。」

ルール地帯の騒動が次第に大きくなり、ロシア革命の影響が、ベルリンでもようやく深刻になりはじめた一月二九日、ベルリンの警視総監は、不穏な運動をしていた革命的なロシアの学生のグループの活躍を内相に報告し、とくにそのなかでも、レオ・メーロウイチ(Leo Meorowitsch)が、革命的な非合法文書を所持し、またこれを配布し活動した始末について書いています。

当時は、ポーランドは、ドイツ、オーストリアおよびロシアの三国に分割されていたので、ポーランドとドイツの国境であったヴァイクセル河畔のロシアの状態の深刻さは頻々としてドイツに伝えられた。ポーゼン州の上院議長フォン・ワルドウ(v. Waldow)の依頼により、やはりポーゼン州の警視総監によって作成された報告書には、ロシアにおける非常に悪化した経済状況について、つぎのよう

「日露戦争によってよびおこされたロシアにおける経済的状態は、そこに住んでいる労働者大衆の間に、軽視することのできない運動をよびおこしました。十月および十一月における予備役召集および動員によって、ロシアの若干の地域には、流血の暴動がおこりました。しかも特にヴァイクセル地域においてそうです。これとともに、ことに、ポーランドの社会主義者やユダヤ人労働者の同盟によってひきおこされたワルシャワの万聖節教会(Allerheiligenkirche)周辺におこった流血事件が指摘されます。三人のロシアの警察官と約二〇〇人の市民が、この事件にその生命を失いました。またラドム、チェンストシャウ、ペトリカウおよびロツズにおいても、職を失って、貧乏に苦しめられている飢えた人民大衆と軍隊および警察との間に、流血の衝突事件がおこりました……。」

またこれにつづいておこった国内における政治的危機についてつぎのように記されている。

「この一月一九日の六時には、全ロシアの労働者にたいして、労働の一斉停止の合図がなされました。ペテルスブルク、モスクワ、リガおよびその他のロシアの中心地で、労働者がストライキに入りました。ペテルスブルクの礼砲につづいて、大貴族セルギウスの暗殺の企てがおこりました。モスクワおよびセント・ペテルスブルクでの失業者大衆の気分というものが、ますます陰気となり、そして突然、一月二一日の夜から二二日にかけて、そのス

トライキをしていた労働者のなかから、暴徒と化した群集が出ました。労働者たちは、冬宮にいるツァーに、個人的に彼の希望を陳情しようとした。しかしながら、召集された軍隊は、労働者が市街内部に入ることを妨害したのです。そのために、血なまぐさい市街戦となり、それによって約二、〇〇〇人が犠牲となりました。このペテルスブルクの蜂起は、ロシアのそのほかの地域にたいして、流血の暴動をはじめ合図となったのです。」

一方、このようなロシアの中心地における労働者の一斉蜂起によってもたらされた革命的な動きに刺戟された、ヴァイクセル地域の政治的危機の状態について、この書簡はつぎのようにふれている。

「ヴァイクセル地域は、血なまぐさい運動が突発した上に、すでに長い間、秘密的革命的な組織がひろがっていました。社会主義的な秘密出版社において、何千という革命的な内容をもつパンフレットの製造が行なわれ、ポーランド社会党、ポーランド国民党およびユダヤ人の労働者の同盟の叫びが、広はんな国民大衆の間に伝えられたのです。この場合につぎのことは記憶される。すなわち、周知のように一九〇四年十一月、同じくロシアの革命的な政党であるポーランド社会党、ポーランド国民党は、いっしょにパリにおいて共同会議を開き、将来にたいする行動の統一の綱領を作りしました。あらゆるポーランドの秘密の急進的な団体の兄弟の契りは、つぎのような結論をもたらしたのです。つまり、ヴァイクセル地域における血なまぐさい出来事は、このような広がり

をとるようになり、将来においては、さらにしばしば最悪の事態のおこることがおそれられるのです。とくに、ロシア・ポーランドの石炭地帯、ドムプロワ、ツギーエルト、およびロツズ県においては、秘密のパンフレットが、もっとも多く、ばらまかれました。ロシアの官憲の懸念の追求にもかかわらず、その印刷所を露見することには成功しておりません。」

この報告を読むと、帝政ロシアの残忍な圧制のもとに被圧民族として苦悩しつづいたポーランド人民の民族独立の運動と社会主義運動との共同闘争の事実を見ることができ、またその労働運動との密接な関連についても理解することができるであろう。すなわちつぎのように報告されている。

「ロツズにおいては一月二七日、ゼネラル・ストライキが宣言されました。大きな工場では、労働者は悉くこの蜂起に参加しました。大通りでは、非常に混雑し、十万人のストライキをしている労働者が、街の広場や通りに群集をなして集まり、すべての工場は閉ざされました。一月二七日の晩には、ガス工場の労働者、肉屋、パン屋、植字工、印刷職工などが、ストライキをしている人に加わりました。市内電車はとめられ、車掌もストライキに加わるように勧告されました。いま街には戒厳令が布かれております。爆弾の破裂、商店の掠奪、街の暴動、あらゆる種類の物権毀損が行なわれております。より多くの工場施設が、煽動的な群集によって破壊されました。公けの場所においては、集会が行なわれ、そ

ここでは、社会主義者の弁士が、大衆にたいし反対して超上るようになり、また自由のための闘争するよう要求するのです……。」

ここには、ロシア革命の深刻な影響が、全国いたるところに浸透し、革命的状況が支配的であったという客観的な証拠がにじみ出ている。ヴァイクセル地域における革命的な状況の支配についての記録は、このほかにもいろいろあげられるが、これについては割愛することとして、つぎに、ロシア革命が、ドイツの労働運動にどのような影響を及ぼしたか、この点についての資料にうつろう。つぎにかかげるのはオッペルン(Oppeln)の県知事が、一九〇五年三月二二日、ウイヘルム二世に提出した報告書の一部である。

「一月にラインランド・ウェストファーレンで勃発した鉱山労働者のストライキは、元来、もっとも活潑に、社会民主党の上部シレジアの指導者の注意をひいた。カトウィッツの労働組合会館で二五〇名の人々が集まって開かれた集会では、党書記で著述家のブルーンズ(Brunns)は、蜂起の原因を詳細に議論した。この集会の弁士は、ルール地帯のストライキをしている労働者を、金を集めること、超過時間の仕事の拒否およびストライキ破りの募集によって、援助することを説いた……。」

ポーランドの社会民主党は、鉱山労働者のストライキの場合にドイツ社会民主党と手をとって進んだ。一方彼らは、とくにボーフム(Boosum……)ルール地方の都会の名……筆者)の鉱山労働者の組合のために運動し、またいたるところで、ポーランド人の

「上部シレシア相互扶助労働組合」(Oberschlesischen Arbeiterverein zur gegenseitigen Hilfe) にたいして調子を合わせるようにした。またロシアの不安に対しては、ドイツおよびポーランド社会民主党は、一致した戦術を追究したのであって、多くの集会において、彼らは無制限の毒舌と脅迫をつみかさね、暴力革命の思想を強調しました。」

同じくオッペルンの県知事が、一九〇五年十月三日、ロシア全土にわたる広はんな政治的なストライキの影響をうけた結果、ドイツの国境地帯が不穏の状勢を呈し、軍隊による国境の守備を要請する旨の内務大臣にあてたつぎの文書によって、ロシア革命の波及から異常な恐怖をあたえられたドイツの支配階級の心裡を理解することができるとができる。

「たったいまカトウィッツの地方長官からわたくしにおくられた電報によれば、ソスノウィッチおよびドムブラウア地域の全労働者階級は、再び仕事を抛棄しました。そして高度の昂奮状態にあります。それは、『ツァーを打倒せよ』という表題をもつ刺戟的なパンフレットの大量の配布によって煽動され、勇気づけられております。これが実際に広はんな基礎における革命的な昂揚になるかどうか、現にここにいる軍隊——ソスノウィッチには、二、三日前から三個連隊が駐留していますが——が、ある程度まできちんとした秩序ある状態を保持することができ、またそうする意志があるかどうか、またついに当地の国境地帯が、依然として隣

国の運動から影響をうけないでいるかどうか、そういうことにかわりなく、二、三日前からソスノウィッチへ通ずる鉄道が明らかにとまってしまつて、そのために、少しでも確実な情報を、ちよつどよい時期に手にいれることが非常に困難になっているといふこと以外には、ほとんど予測できません。

われわれの労働者階級の仲間の気分というものは——昨日および昨日、カトウィッツおよびツァーブルツェにおいて確められたように——これまでは「応静穏です……」。

ロシアの国境守備隊が、まったく役に立たなそうに思われるとき——それはほんとうにありうることであるが——こういう出来事の可能性および公算が、いちじるしく増大します。人口密度の高い地域において、現在の交通事情が長くつづくことによっておこる食糧事情の悪化は、この方向にたいして悪い影響を及ぼすことになる。また他方において、つぎのような点が考慮されなければならぬ。すなわち、はじめのストライキないし蜂起の際の労働の指導は、ここで過度にやることをさせたのであって、その場合には彼らは、このような種類の出来事はプロイセン側からの武力的な干渉を招来するという考慮から、いかなる場にも出発するのです。」

セント・ペテルスブルクにおける「血の日曜日」と同じように、ドレスデンにおいても、大衆の平和的なデモストレーションにたいする官憲の暴行が行なわれた。これにたいし、一九〇五年十二月五

日、ザクセン州議会の第二議会において、下院議員、ゴールドシュタインは州政府にたいし、つぎのよう質問し、その責任を糾した。

「政府は今年の十二月三日に、ドレスデンおよびシエムニッツの警官によって、平和な民衆にたいして加えられた遺憾な処置を認めようとする意志なのか、また政府は、このような暴力的な処置が再びくりかえされるのを防ぐために、どのような手段を考えているのか。」

いうまでもなく、一九〇五—一九〇七年のロシア革命はドイツ社会主義運動や労働運動にたいしてだけでなく、国際的な社会主義運動にも深甚な影響をあたえたが、当時のドイツ帝国の治安当局は、ロシア革命とドイツ社会主義運動との関係をどのように評価していたのであろうか。最後に、これについて、ベルリンの警視庁によって作成された「一九〇五年の半ばから一九〇六年の半ばにいたる時期における社会民主主義的無政府主義的運動の一般的な状態についての展望」から、ロシア革命が国際的な社会主義運動にあたえた影響について評価してみよう。

「ロシア革命は、ロシア帝国の境界をこえて波及したせ、すべての国際的な社会民主主義に影響をあたえました。国際的な社会民主主義は、それによつて、しばらくの間、いままでどこでも、このような規模ではありえなかつたほどの強い急進的な色合と一定の革命的なエネルギーを感受しました……」

それは、ドイツおよびオーストリアの著者たちによつて、選挙

一九〇五—一九〇七年の第一次ロシア革命のドイツに及ぼした影響

権闘争が遂行されていったあの頑固な情熱についても同じようなことがいえよう。そしてさらに社会民主党の指導者のみならず、至るところでみずからその状勢の主人公であると思つている社会主義的労働者大衆の自己意識のまったくいちじるしい昂揚についても同様であります。なぜなら人は、この範圍において、つぎのようなことについては確信していたし、また確信しているからです。すなわち、人々が決して疑わなかつたツァーの王冠が、革命の洪水のなかに没してしまつてしまつたやいなや、他の世界のプロレタリアートにとつて、解放の時が打つたのだということ(傍点筆者)。

この叙述は、官憲が書いたものとしては比較的公平に、且つ客観的なものと考えられるが、さらに報告書は、ロシア革命が国際的な社会民主主義運動にあたえた影響を、「道徳的な側面」と「物質的な側面」の二つにわけて詳細に論じている。ドイツ社会民主主義にかんする叙述には見るべきものはないが、全体的に分析の鋭さがうかがわれる。

(1) Nr. 1 der Quellen; Deutsche Botschaft in Russland an den Reichskanzler von Bülow. St. Petersburg, 8. August 1903. (Bd. 1. S. 17)

(2) Nr. 2 der Quellen; Kaiserl. Deutsches Generalkonsulat in Warschau an den Reichskanzler von Bülow.

- Warschau, 20. August 1903. (S. 18)
- (30) Nr. 3 der Quellen; Geheimabkommen verschiedener europäischer Staaten zwecks einheitlicher Überwachung der „anarchistischen“ Bewegung. St. Petersburg, 1./14. März 1904. (S. 19)
- (31) Nr. 5 der Quellen; Aus den Polizeiberichten über die Arbeiterversammlungen in Berlin, 25 Januar. 1905. (SS. 22-23)
- (32) Nr. 6 der Quellen; Innenminister von Hammerstein an Wilhelm II. Berlin, 27. Januar.
- (33) Nr. 7 der Quellen; Der Polizeipräsident in Berlin an den Minister des Innern. Berlin, 29. Januar 1905. (S. 28)
- (34) Nr. 13 a der Quellen; Bericht über die Ereignisse bei den Arbeiterunruhen im Weichselgebiet. (S. 37)
- (35) Ebenda. (S. 37)
- (36) Ebenda. (S. 38)

- (37) Ebenda. (S. 39)
- (38) Nr. 13 b und c. (SS. 45-64)
- (39) Nr. 27 der Quellen; Aus dem „Zeitungsbereich des Regierungspräsidenten in Oppeln über die Monate Januar, Februar und März 1905“ an Wilhelm II. Oppeln, 12. Mai 1905.
- (40) Nr. 37 der Quellen; Der Regierungspräsident in Oppeln an den Minister des Innern, Oppeln, 30. Oktober 1905. (S. 115)
- (41) Nr. 45 der Quellen; Interpellation des Abgeordneten Goldstein in der II. Kammer des Sächs. Landtages. Dresden, 5. Dezember 1905. (S. 124)
- (42) Nr. 88 der Quellen; Auf der „Übersicht über die allgemeine Lage der sozialdemokratischen und anarchistischen Bewegung in der Zeit von der Mitte des Jahres 1905 bis zur Mitte des Jahres 1906, ausgearbeitet von Polizeipräsidentium in Berlin. (S. 234)

### ウィリアム・ゴドウィン研究文献(二)

白井厚

#### IV 経済思想

ゴドウィンの経済思想は、その政治学と同じように、道徳哲学の一分枝である。彼は、経済問題をそれ自体としてではなく、道徳や政治と関連したものとして扱った。「政治的正義」の後の版が、H. S. ソールトやR. A. プレストンなど経済学者の観点から編集されたことは不幸であった。ゴドウィンを経済学者の判断に従わせることは明らかに不適當である。

経済学者が財産制度を与えられたものとしたのに対し、ゴドウィンはその制度の哲学的基礎をたずねた。彼は交換、需要、供給、価格などの問題を無視し、労働価値説を価格分析のためではなく、所有権の倫理的問題との関係において適用した。彼は、財産制度と政府、強制、刑罰などの害悪との関係を「最も一般的な原理において」検討しようとする。

彼の思想とロックとの関係は興味深い。もし、所有の限界として *perishability* を *use* に代え、貨幣と交換制度がなければ蓄積の

目的は失われるというロックの説を採ると、これは非常にゴドウィンに近い。かくして、余分なものを自発的に貧しい人々に与える個人的生産者というゴドウィンの社会の基礎が生まれよう。

ゴドウィンの三つの財産の段階は、ロックにその基礎を置き、*Smith* においてさらによく現われている。ゴドウィンはこれを体系的に論理的に整理した最初の人であろうし、後の社会主義に大きな影響を与えたのは、彼の明確な定式化であった。そこから、生存権と全労働取益権の間の宿命的な争いが生まれた。彼は生存権を根本的に優越させている。

財産論において、彼は聖書やスィフトの *Sermon on Mutual Subjection* に言及しているけれども、財産の蓄積に対する攻撃は「ガリバー旅行記」や「ユートピア」にも見出だせるし、またモレリイ、マブリー、プリンなど革命前のフランスの著作家にも非常に多くの例があった。だが彼の富に対する強力な攻撃の真の先駆はフランス人ではなくて、スコットランドの教授W. オウグルヴィーであ